

## 1、現状の説明

### (1)教育目標に沿った成果が上がっているか。

#### 【大学全体】

本学では、教育目標に基づいて、卒業又は修了時に学生が身につけるべき能力を「学位授与方針」に定め、それらの能力が身につくよう教育課程を編成し、「教育課程の編成・実施方針」に示している。個別の授業はこれらの方針を基盤として行われるため、まずは授業に合格すること、そして学修の集大成となる論文の作成と学位授与をもって成果を測ることとなる。

個別の授業の達成基準は、シラバスに設けられた「学習到達目標」の項目に記している（資料4(4)-1『授業計画（シラバス）2014』）。授業に3分の2以上出席し、この目標に達した者を合格とし、その達成度は4段階（S：100～90点、A：89～80点、B：79～70点、C：69～60点）で、その評価の判断基準と共に学生に示している（資料4(4)-2『履修要項2014』p.113、p.417）。また、本学では原則受講生10名以上の授業を対象にして、 Semesterごとに「学生による授業評価アンケート」を実施している。アンケート項目の多くは、学生が授業の運営や内容を評価するものであるが、中には受講生自身の学びの姿勢を問うものもあり、自らの学びを振り返る機会となっている（資料4(4)-3『授業をより良くするために—学生による授業評価アンケート—結果報告書』2013年前期・後期）。更に、卒業生の視点により本学の教育を反省するために、3年に一度「卒業生アンケート調査」を実施している。これは、卒業生が自身の学生生活を振り返るものであり、卒業生の本学における学習成果を知る貴重な機会となっている（資料4(4)-4『大谷大学—卒業生アンケート調査—調査結果報告書』）。

学生の学習成果を測定する、最も重要な指標は論文と学位授与状況であるが、就職率・進学率、主な資格取得者数などのデータもこの測定を補足するものである。これらのデータは毎年蓄積しており、就職率および業種は本学HP「就職実績」で公開している（資料4(4)-5 本学HP「就職実績」）。

#### 【文学部】

先述したように、シラバスには「学習到達目標」を記載しており、この目標に達した者を合格とし、その達成度は4段階で学生に示している。文学部ではGPA制度を導入しており、学生本人の意欲喚起につなげると同時に、この情報を指導教員に提供し、学生の個別指導に役立てている。この制度を導入して7年が経過するが、今のところは数値の大きな変化はみられない。2013年度前期について言えば、2.00～2.49を頂点とするピラミッド型になっていることから、各教科を担当する教員がバランスよく評価していることがわかる（資料4(4)-6「GPA資料」2012年度前・後期、2013年度前期）。

学生の学習成果を測定する最も重要な指標は「卒業論文」と「学位授与」である。文学部では、学修の集大成となる「卒業論文」を全学科で必修としており、学位の取得には、所定の単位の修得とそれを前提にした卒業論文の提出を求めている。卒業論文の提出後は口述試問が課せられる。学位授与すなわち卒業者数は、2012年度では第4学年在籍者949名に対して777名、2013年度は第4学年在籍者915名に対して732名である（資料4(4)-7 本学HP「卒業生数」）。

## 第4章 教育内容・方法・成果

### (4) 成果

#### 【大谷大学】

繰り返しになるが、上記のほかに学習成果を測定するものとして「学生による授業評価アンケート」がある。Semesterごとに実施するアンケートは、自らの学びを振り返る機会となっている。また、卒業生を対象にしたアンケートも、卒業生にとっては、本学において学んだ内容を社会人の視点から振り返ることができ、大学にとっても、カリキュラムや授業を反省するための貴重な資料となっている（資料 4(4)-4）。

教員養成を主たる目的とした教育・心理学科においては、小学校と幼稚園の教員免許取得状況と採用実績が学習成果を測るもう一つ大きな指標である。この学科は2009年に設置した学科で、まだ卒業生を2回送り出したばかりであるが、2012年度は卒業生93人中教員免許取得者が70名、教諭・常勤講師・非常勤講師を合わせて小学校又は幼稚園に採用された者が45名という成果を出している。同様に2013年度は卒業生99人中教員免許取得者65名、採用は41名。2014年度では12月現在で教諭として採用が決定している学生が15名となっている。

#### 【文学研究科】

文学研究科においても、各科目における学生の学習は、シラバス記載の「学習到達目標」に則して評価する。到達目標に達した者を合格とし、その達成度は4段階で学生に示している。なお、大学院は履修単位数が少なく、学生数も少ないのでGPA制度は導入せず、指導教員の対面指導での学習状況把握を重視している。

また、学生の学習成果を測定する最も重要な指標は「修士論文」、「博士論文」と「学位授与」である。修士課程と博士後期課程の学位請求論文は、それぞれ『履修要項』に明記した「修士論文 評価基準」、「博士論文 評価基準」によって評価する（資料 4(4)-2 p.390、p.393）。第4章(3)にも記載したが、修士課程、博士後期課程とも研究計画書の提出を義務づけ、論文作成およびそれに向けての指導が計画的に行われるよう促している。特に博士後期課程については、専攻ごとの詳細な研究計画モデルを『履修要項』に示している（資料 4(4)-2 pp.396-401）。

次に学位取得状況を見てみると、修士課程については、2012年度は第2学年54名に対して、学位を授与したのは43名であった。2013年度は第2学年生44名に対して、学位を授与したのは34名であった。

他方、博士後期課程については、2012年度は第3学年27名に対して、学位を授与したのは3名であった。2013年度の第3学年22名に対して、学位を授与したのが5名であった（資料 4(4)-8「大学院における学位授与状況」）。

なお、博士後期課程においては、学位請求論文を提出する資格のひとつとして、『大谷大学大学院研究紀要』への投稿を必須としている。指導教員の指導を受けながら作成し、論文掲載においては査読制度を取り入れており、学位請求論文に向けて自身の成果を確認するステップの役割を果たしている。

また、文学部と同様に、文学研究科においても、原則10名以上の受講生がいる授業を対象にして、Semesterごとに「学生による授業評価アンケート」を実施している。アンケートは、自らの学びを振り返る機会となっている（資料 4(4)-3）。

## 第4章 教育内容・方法・成果

### (4) 成果

#### 【大谷大学】

#### (2)学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。

##### 【大学全体】

本学では、「大谷大学学則」および「大谷大学大学院学則」に卒業および修了要件を定め、「大谷大学学位規程」において学士、修士、博士の学位授与の要件や学位論文審査の手順などについて詳細を定めている（資料 4(4)-9「大谷大学学則」、資料 4(4)-10「大谷大学大学院学則」、資料 4(4)-11「大谷大学学位規程」）。また、授業科目の履修については「大谷大学文学部履修規程」「大谷大学大学院履修規程」に定めており、厳格に運用している（資料 4(4)-12「大谷大学文学部履修規程」、資料 4(4)-13「大谷大学大学院履修規程」）。

具体的には、【文学部】【文学研究科】の項に記載する。

##### 【文学部】

文学部では、「大谷大学学則」第 19 条に「学生は 4 年在学し、卒業単位一覧表に基づき、次の基準により、124 単位を履修しなければならない。」と卒業要件を規定し、「大谷大学学位規程」第 5 条に、「学士の学位は、本学学則の定めるところにより、本学学部を卒業した者に授与する。」と学位の授与について規定している（資料 4(4)-9、資料 4(4)-11）。124 単位の内訳は第 4 章 (1) に記載したとおりであるが、第 4 章 (3) でも述べたように、「大谷大学文学部進級規程」を定めており、第 1 学年・第 2 学年・第 3 学年の年度末に、定められた科目や単位数を満たしているかどうかを教授会で判定し、進級の可否を決定している。また、卒業論文を必修とし、第 4 学年で提出することとしている。なお、この「大谷大学文学部進級規程」は 2013 年度入学生から適用しており、それ以前の入学生については、第 3 学年の年度末に「進級」ではなく「卒業論文提出資格」の有無を判定している。卒業論文の提出後は口述試問を行うこととなっており、口述試問は指導教員が主査となり、論文の内容を踏まえて選ばれた副査とともにを行っている。最終的には卒業要件を満たしているかどうかを教授会で審議し、卒業が認定された者に学位を授与している。以上のように、進級や口述試問をはじめ卒業の認定、学位授与は明文化した手続によって厳正に行っている。

卒業要件、口述試問、「大谷大学文学部履修規程」、「大谷大学文学部進級規程」、「大谷大学学位規程」は『履修要項』に明示し、学則については『学生生活サポートブック』を入学時に配付することによって学生に周知している（資料 4(4)-2 p.23、p.105、pp.118-124、pp.422-425、資料 4(4)-14『学生生活サポートブック 2014』pp.82-90）。

##### 【文学研究科】

文学研究科では、「大谷大学大学院学則」第 17 条に「本学大学院修士課程に 2 年以上在学し、その正規の授業を受け、教育・心理学専攻にあつては所定の授業科目 32 単位を、その他の専攻にあつては所定の授業科目 34 単位を履修し、かつ、必要な研究指導を受けた上、学位論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。」と修士課程の修了要件を定め、第 18 条に博士後期課程の修了要件を「本学大学院博士後期課程に 3 年以上在学し、その正規の授業を受け、所定の授業科目 18 単位を履修し、かつ、必要な研究指導を受けた上、学位論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。」「課程修了の要件には、その研究に必要な 2 ヶ国語以上の外国語によく通ずること

## 第4章 教育内容・方法・成果

### (4) 成果

#### 【大谷大学】

を条件とする。」と定めている（資料 4(4)-10）。

また、「大谷大学学位規程」にて、博士および修士の学位授与の要件、申請方法、大学院委員会による受理の可否、審査委員体制の決定、審査結果報告を受けての論文可否の議決、学長による学位授与の決定、論文内容と審査結果の公表等について定めている（資料 4(4)-11）。論文審査は、学位請求論文を提出した学生の指導教員が主査となるが、文学研究科の7専攻の教員から構成される大学院委員会での議を経て、受理・審査体制・可否を決定しており、学位授与の客観性・厳格性を確保している。特に博士の学位請求論文については、最終試験までに公開の場である学位請求論文発表会で発表することを義務づけており、更に審査委員についても、三親等以内の者を含めないこと、学外者を含めることを原則とするなど、審査プロセスがより透明で客観的なものになるよう制度化している。なお、論文審査の基準については「修士論文 評価基準」「博士論文 評価基準」としてそれぞれ4項目定め、『履修要項』に明示して学生に周知している（資料 4(4)-2 p.390、p.393）。

また、修了要件、「大谷大学学位規程」、「大谷大学大学院履修規程」も『履修要項』に明示し、学則については『学生生活サポートブック』を入学時に配付することによって学生に周知している（資料 4(4)-2 p.390、p.393、pp.422-428、資料 4(4)-14 pp.91-98）。

## 2、点検・評価

### ●基準 4 (4) の充足状況

学生の学習成果を測るための指標となる論文の提出状況、学位授与基準とその運用、そして学位授与状況を総合的に評価すると、本学の教育成果はおおむね同基準を充足している。しかし、学位授与方針に定めた能力が身についたかどうかを判定する評価指標の開発はまだこれからの課題である。

#### ①効果が上がっている事項

「卒業生アンケート」を実施したことにより、卒業生における学修成果の把握という点で活用できる貴重な資料を得ることができた。特に人間学については、在学中より卒業後の方が評価は高く、本学の基盤科目の重要性を再確認することができた。

#### ②改善すべき事項

##### （GPA 活用システムについて）

GPA については、本学でも既に導入しており、その数値は学生自身と指導教員に通知している。指導教員には学科や全学平均値も通知し、個別の指導に活かしている。しかし、全学的な教育目標を視野に入れた、この資料の活用に関するシステムは今のところ存在していない。

##### （博士学位取得率について）

文学研究科では、学位授与の円滑化を図るため、満期退学制度を廃止し、在学中に博士論文を提出し学位を取得できるよう、2009年度入学生から研究指導体制を改訂した。学位取得者の増加は、その成果のあらわれを示しているが、取得率はまだ低い。

##### （学生の学習成果を測る評価指標について）

学生の学習成果について、学位授与方針に定めた能力が身についたかどうかを判定する評価指標がまだ確立できていない。

## 第4章 教育内容・方法・成果

### (4) 成果

#### 【大谷大学】

### 3、将来に向けた発展方策

#### ①効果が上がっている事項

「卒業生アンケート」の内容を踏まえ、その結果を教育内容へとどのように反映させていくか、教育推進室において更に検討していく。

#### ②改善すべき事項

##### (GPA 活用システムについて)

これまでのところ GPA の利用は主に各教員にゆだねられており、それが本学の特徴であるきめ細かな指導につながっている。しかし、この数値を更に広く利用することで、学生の学習意欲を喚起することもできる。奨学生を選考する基準にすることや、優秀な学生を表彰する制度などに GPA を活用することについて、教育推進室で検討する。

##### (博士学位取得率について)

学位取得率の向上のため、今後も引き続き大学院運営委員会で大学院の教育課程や指導体制について検討する。

##### (学生の学習成果を測る評価指標について)

学位授与方針に定めた能力が身についたかどうかについては、まずは学生自身による振り返りについて、教育推進室において検討する。

### 4、根拠資料

資料 4(4)-1 『授業計画 (シラバス) 2014』 (既出 (4(3)-5))

資料 4(4)-2 『履修要項 2014』 (既出 (4(1)-2))

資料 4(4)-3 『授業をより良くするために—学生による授業評価アンケート—結果報告書』  
2013 年度前期・後期

資料 4(4)-4 『大谷大学卒業生アンケート調査結果報告書』

資料 4(4)-5 本学 HP 「就職実績」

[http://www.otani.ac.jp/career\\_support/nab3mq00000012d6.html](http://www.otani.ac.jp/career_support/nab3mq00000012d6.html)

資料 4(4)-6 GPA 資料 2012 年度前・後期、2013 年度前期

資料 4(4)-7 本学 HP 「卒業生数」

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq00000012gsm-att/nab3mq00000012hfe.pdf>

資料 4(4)-8 「大学院における学位授与状況」

資料 4(4)-9 「大谷大学学則」 (既出 (序-1))

資料 4(4)-10 「大谷大学大学院学則」 (既出 (1-5))

資料 4(4)-11 「大谷大学学位規程」

資料 4(4)-12 「大谷大学文学部履修規程」 (既出 (4(2)-3))

資料 4(4)-13 「大谷大学大学院履修規程」

資料 4(4)-14 『学生生活サポートブック 2014』 (既出 (4(1)-7))